

構造改革特別区域計画

1 構造改革特別区域計画の作成主体の名称

三笠市

2 構造改革特別区域の名称

岡山・萱野小中一貫教育特区

3 構造改革特別区域の範囲

三笠市の区域の一部(岡山小・萱野中学校校区)

4 構造改革特別区域の特性

三笠市は、北海道のほぼ中央に位置し、人口が12,600人(平成16年4月1日現在)の小さな市である。

明治元年、この地で「燃える石・石炭」が発見されて以来、北海道で初めての鉄道が敷かれるなど、北海道開拓の先鞭を担った本市は、炭鉱で栄えたまちで、ピーク時には、63,000人であった人口も、相次ぐ炭鉱の閉山により、減少していった。

現在は、先人が嘗々たる努力によって築き上げてきた120年を超える歴史と産業遺産を後世へ引き継ぐとともに、札幌まで30分、また、道央・道東を結ぶ最短ルートを活かした観光資源の開発のほか、快適な住環境の整備を図り、市民が安心して暮らせる、「市民の誰もが住んでいて良かったと思えるまちづくり」をめざしている。

また、市の面積は、302.64km²で、うち86%が森林に覆われ、水と緑に囲まれた豊かな自然と、四季折々の気候に恵まれ、中世代白亜紀の地層からは、国の天然記念物のエゾミカサリユウ、翼竜やアンモナイトなどさまざまな動植物の化石が豊富に産出されている。

炭鉱の閉山など市の産業構造の変化による人口の減少に伴い、少子・高齢化が急加速する中で、自立と発展に向けた三笠市の活性化を図るためには、地域を愛し、地域の産業の発展を願う児童生徒の育成が望まれ、そのためには、小中が連携を図りながら大都市に負けない特色と魅力を持ち、地域から強く信頼される学校づくりに取り組む必要がある。

本市の岡山・萱野地区は、市の西部に位置し、岡山県や鳥取県からの移住者などからなる農村地帯であり、昔から市内の他の炭鉱地域とは一線を画し、地域を挙げて、学校行事や子ども会活動、また、岡山地域の伝統芸能である岡山傘踊りの保存・伝承に努めるなど、学校と地域が一体となった取り組みを行っている。

また、この地区は、空知支庁所在地の岩見沢市に隣接している地域でもあり、工業団地の造成や新興住宅団地の造成、また、来春には、道央の中心国道である12号線沿いに、大型スーパーが進出するなど地域の環境に変化がみられるようになり、今後、人口の流入や

将来予測される複式学級の解消も期待される地域である。

本市岡山・萱野地区は、小学校が岡山小学校1校、中学校が萱野中学校1校で学区が一致していて、岡山小学校を卒業した同じ顔ぶれがそのまま、萱野中学校に入学している。

地域住民同士のつながりが深く、地域社会の結びつきが強い土地柄で、地域行事、子ども会行事など同じメンバーでの活動が多い。

また、岡山小学校、萱野中学校は、約800m離れているが、従前から運動会を合同で行ったり、萱野辺コンサートを開催するなど、小・中学校の連携を密にした、交流が深められている。

岡山小学校では、「“岡小タイム”での基礎学力の定着及び授業改善」、「総合的な学習の時間での体験学習・調べ学習を通して地域や環境に関心をもたせる取り組み」、「異学年による縦割り班活動」など、また、萱野中学校では、「基礎・基本の定着を図るために自己評価を活用した授業実践」、「人間としての生き方を考えさせるための人権・平和・性の学習の充実」、「自ら学び、自ら考え、自ら問題解決できる生徒を育成するための総合学習」など、独自の教育活動を実施し、教育内容の基盤づくりが進んでおり、指導と評価の一体化を図ってきている。

このようなことから、今回、岡山小学校・萱野中学校での小中一貫教育を実施するが、今後、より一層、小中の連携を強め、小学校と中学校が9年間に渡って、児童・生徒の成長を見つめ、一人ひとりの個性を生かしながら、確かな学力や豊かな人間性を身につけていくために、全市的な小中一貫教育の実現をめざすこととしたい。

5 構造改革特別区域計画の意義

義務教育は、ただ単に各教科の知識を身につけさせるだけではなく、一人ひとりが学ぶことの楽しさを知り、自分の個性や能力に気づき、生涯に渡って学び続けるための資質を身につけることができる、ということが重要な課題である。

三笠市が考える小中一貫教育は、この重要課題を解決するための一つの手段である。

小学校と中学校の枠を超えて、9年間を一つのスパンとした学校間の連携システムを構築していくことにより、義務教育機関の学びの「連続性」を確保することができる。その結果、児童生徒、そして保護者にとってみれば、小学校と中学校のギャップを感じることなく、「安心して通うことができる学校」、「確かな学力を保障してくれる学校」づくりが可能となる。また、教師にとっても9年間の児童生徒の育成をしっかりとらえることで、今まで以上に適切な指導を行うことができるといったメリットがある。三笠市では、従来の学校の施設・設備を大きく変えることなく、小学校、中学校間での児童生徒の交流や教師の交流、そして系統性をもったカリキュラムの実施を通して、小学校・中学校間の接続を図り、9年間の一貫した教育を行うことで、次の二つの意義があると考えた。

(1) 9年間の一貫した教育を通して、確かな学びのできる生徒を育成できる。

児童生徒がとまどうことなく学校生活を送れるようにするために、小学校と中学校のカリキュラムの無理のない接続を図り、9年間の一貫した教育を実施する。

9年間を見通した系統的な学習指導を通して、基礎的基本的学力と実践力を育てる。

検定試験、作品応募等に取り組みさせることにより、個性と能力の伸長を図る。

(2) 地域の特色を生かした教育を推進できる。

子どもたちが恵まれた地域の自然環境や産業、歴史へと目を向けることによって、地域に対する興味関心を高め、三笠を知り、三笠を愛し、三笠で生きること誇りを持ち、三笠の未来を考えて、まちづくりの発展に尽くそうとする態度を育成する。

これらを9年間を見通した「地域科」の時間を設け、地域の特色を生かしながら、地域の教育力をも活用し、子どもを育成していく。

系統性をもって三笠市の歴史・文化・産業についての学習を深め、社会に生きるための資質を培う。

教育に関わる情報の提供や学校の実態交流等を通して、地域社会との連携を深め、地域の教育力の向上を図る。

保護者や地域住民の方々の学校運営への参画を通して、学校の活性化を図る。

6 構造改革特別区域計画の目標

(1) 三笠市の目指す目標

三笠市は、人間尊重を基本とし、誰もがこのまちに住んでいてよかったと思えるまちづくりを進めてきている。

三笠市総合計画審議会の、「人づくりは、まちづくりの根源であり、未来を支える子どもたちを何よりも優先し、家庭・地域社会全体で育ていき、魅力ある三笠の教育の推進に努めていく」答申を受け、子どもたちが、郷土「みかさ」への関心・愛着心を高め、このまちに住んでいることを誇りに思い、まちづくりを考える学習が必要である。

現行の社会科の地域学習では、一時的・一般的な知識獲得で終わりやすく、市や地域の学習に触れることが少なく、地域を知る機会はあるが、より広く深める発展的な学習の時間を確保することは難しい。

また、地域の特色である化石・地層・石炭などの地域素材に焦点をあてることにより、自分たちの生活している地域に関心を高め、地域との関わりを実感し、主体的に関わる態度の育成には少し長い時間をかけ、計画的に取り組む必要があると考える。

今後、三笠市全域での小中一貫教育の実施を想定しており、三笠市の自然や人との関わりを題材に、博物館等に所蔵されている貴重な資料を子どもたちのために生かしながら学習する必要があると考えた。

長期にわたる地域学習は、絶えず自分と地域との関わりについて考えることにつながり、三笠市に住む人々と自分を密接に感じることができる。そこから地域の人々への働きかけ、学習を通しての職業観の形成、これからの三笠市の発展やまちづくりについて考える資質を育成する。

今回考える学習は、地域の自然・文化・歴史・産業などを素材にし、三笠市で生活する人々の思いに触れ、自らの生き方を育成する態度を育てるものである。

(2) 到達目標

9年間の一貫した教育を通して、基礎学力の充実と基礎・基本の確実な習得に努め、児童生徒一人ひとりが社会に出て、たくましく生きるために必要な個性と能力を培う。

自ら学び、自ら考え、自ら問題解決できる自立性・社会性をもった児童生徒を育成する。

小中一貫教育と地域社会との連携を通して、児童生徒が安心して学ぶことができる環境を整備する。

教師と子どもとの信頼関係及び子ども同士の好ましい人間関係を深めることや児童生徒理解を深めることを通して自立性と社会性を身につけさせ、将来を見据えた自己の生き方を考える態度を育成する。

(3) 目標達成のための具体的方策

9年間の一貫教育という特性を十分に生かした教育課程を編成するために、各教科等のカリキュラムの見直しを図り、学習時間にゆとりをもたせるなどの工夫を行う。

児童生徒一人ひとりの個性と能力の伸長が期待できる選択教科又は新学科を開設し、小学校5年生から選択学習を実施する。

国際社会に適應できる児童生徒を育成するために、日常生活に直接役立つ英会話を中心とする英語教育の充実を図る。

三笠を知り、三笠を愛し、三笠の未来を考える児童生徒を育成するために、三笠市の歴史・文化・産業についての学習を系統性を持たせて「地域科(三笠発見科)」として実施する。

生徒指導における方針及び方法の共有化を図り、児童・生徒の実態交流会を実施する。また、系統性をもった進路指導の実施、性の学習の実施を行う。

(4) 2・3・4制の実施

小中の9年間の 期から 期までの3つに区分し、各期のたまかなねらいを設定したうえで、小学校と中学校のカリキュラムの無理のない接続、基礎的基本的学力の充実、課題解決能力・実践力の育成、個性と能力の伸長、地域学習の充実、教師の指導形態を図るために、現行の6・3制の区分ではなく、2・3・4制とした。これは、児童・生徒の心身の発達の加速化、認知・思考面の発達の質的な変化や 期の小学3年生から5年生までの3年間で、基礎基本の充実、地域学習への取り組みの開始、 期を小学6年生からの4年間とすることで中学校へのスムーズな移行、ゆとりをもって学習できるという意味も含まれている。

区分の概要は、次のとおりである。

区分	学 年	指導形態	ね ら い
期	小学1・2年生	学級担任制	・ 学校生活の定着

			・ 学び方の学習
期	小学 3・4・5 年生	学級担任制 (一部教科担任制)	・ 基礎的基本的学力の充実 ・ 地域学習の充実 ・ 個に応じた指導
期	小学 6 年生 中学 1・2・3 年生	教科担任制 (一部学級担任制)	・ 課題解決能力実践力の育成 ・ 個性と能力の伸長

(5) 「選択学習」(岡小チャレンジ)の実施

児童・生徒の個性と能力の伸長を図ることを目的として、5年生、6年生に「選択学習」を実施する。

選択学習の内容は、子どもの生活や興味関心と学習内容とを結びつけた学習を行い、芸能・体育的な内容に限らず、各教科との関連や発展も考慮する。

(6) 「地域科」の設置

地域の特性に目を向け、地域の自然、歴史、産業に対する興味・関心を高めるため、本市内に存在する各種機関との連携を図り、「地域科」の時間の指導に協力してもらう「地域教育アドバイザー」の派遣や地域の機関の児童・生徒受け入れ事業を取り入れる。

具体的には、三笠市は、アンモナイトなど貴重な化石資源の宝庫であり、世界でも稀な地層であることから、その研究を行っている三笠市立博物館との連携により、環境問題を考える素地を養ったり、地域の産業に関わる専門家による授業、石炭で栄えた三笠の歴史の郷土史研究者による授業を行う。

期課程(小学3年生～5年生)

- ・ 地域に存在する学習素材、人材を有効活用し、三笠市の成り立ちを学び、三笠市の未来について考える。

期課程(小学6年生～中学2年生) 中学3年生は、実施しない。

小学6年生、中学1年生

- ・ 三笠の住民の一人として、今、まちのために何ができるのかを考える。

中学2年生

- ・ 三笠の未来の姿を思い浮かべ、中学生なりの三笠のまちづくりを考えて、まちづくりの提案も行っていく。

なお、指導体制・指導方法については、前述した「地域教育アドバイザー」を活用する。

(7) 小学校からの英語教育(OK! ENGLISH!)の導入

現在の学校教育における英語科は、中学校から導入されている。以前の英語科は、「読

む・書く」などの文法指導が中心であった。そのため、「受験英語」と言われたり、「会話」の出来ない大人という批判を生んでいる。現行の学習指導要領では、「コミュニケーション能力」の育成が重視されている。

「実践的コミュニケーション能力」の育成を願うのならば、中学生になってからの言語習得では難しい。それは、児童の発達段階に起因しており、脳の発揮する力、すなわち、「脳力」の「臨界期」が9歳前後にあると考えられる。脳力の「臨界期」とは、以下の通りである。

脳は、8歳までに約90%の成長がなされる。この時期を「臨界期」と呼び、言語に関しても、臨界期までに、多国語環境に身を置く事により、外国語を母語並みに扱う力を育成する事が可能になる。(北海道大学大学院 医学研究科脳科学専攻教授澤口俊之氏の講演による。) 「総合的な学習の時間」における小学校英語活動の手引「ハローイングリッシュ」(北海道立教育研究所編)から引用

小学生の時期に外国語に触れ、音声面の感覚や能力を養ったり、外国の文化に触れることは、「実践的コミュニケーション能力」を養う事に繋がる。外国語の中でも、多くの国でより多くの人々に使われているのが英語であるため、コミュニケーションをとる手段の一つとして「英語」に取り組む。

また、小学校段階の子どもは、新しい事象への関心が高く、異文化や外国の人との関わりを自然に受け入れる事ができる「違いへの寛容さ」がある。この感性や柔軟性を持って英語に触れることが、国際理解やコミュニケーション能力育成に重要である。

岡山小学校においても、同様な児童の実態が見られることから、小学校段階からの英語指導(国際理解教育)が実践的コミュニケーション能力や豊かな国際感覚の育成に繋がると考え、教育課程に導入することにした。英語を窓として、子どもたちの視野を、広く世界に向けさせることが重要である。

(8) 生活・進路指導

目 標 (ねらい)

教師と子どもとの信頼関係及び子ども同士の好ましい人間関係を深めることや児童生徒理解を深めることを通して自立性と社会性を身につけさせ、将来を見据えた自己の生き方を考える態度を育成する。また、小学校と中学校の教員がお互いに連携し、授業を交流し合い、子どもの実態を話し合う。

具体的な取り組み

- a. 児童・生徒の実態交流会の実施・・・生徒指導における方針及び方法の共有化を図る。
- b. 系統性をもった進路指導の実施・・・児童生徒一人ひとりに能力と適性をつかまえさせ、自己の生き方を考えさせる。

c . 系統性をもった性の学習の実施・・・9年間を通して、次の6つのことを身につけさせる。

- ・ 自分の命のルーツがわかり、生命誕生の過程がわかる。
- ・ 自分や異性の体の特徴、二次性徴の変化・意義・原理がわかる。
- ・ 自己の性を肯認でき、異性の性も尊重できる。
- ・ 思春期の心の変化と特徴が理解でき、生きがいに結ぶ関係を作っていける。
- ・ 妊娠や避妊の原理がわかり、責任ある性行動を選択していける。
- ・ 性感染症やエイズの基礎知識があり、慎重な性意識のもとに行動できる。

7 構造改革特別区域計画の実施が構造改革特別区域に及ぼす経済的社会的効果

(1) 自分の住む地域に対する興味・関心を高め、三笠を知り、三笠を愛し、三笠の未来を考える学習を系統的に行うことにより、三笠のまちづくりを考える態度を育成し、将来の「住んでよかった」まちづくり、人口減少のまちを救っていける人材として、三笠市の発展に寄与することができる。

また、地域教育アドバイザーを創設、授業を行うことで、地域全体の教育力が高まっていき、産業や行政の専門家から直接授業を受けることにより、職業観が高まっていく。

(2) 小学校からのコミュニケーション能力の育成を重視した英語教育を行うことで、外国語や異文化への興味関心が高まり、国際感覚が養われていくとともに、中学校英語へのスムーズな移行が図られ、中学校入学時への不安が解消される。

(3) 三笠市は、今後、児童・生徒数の減少による学校統廃合を視野にいれながら、全域に特区の区域を拡大していくことを検討しており、今回の岡山小学校、萱野中学校における小中一貫教育の実践の成果が、三笠市としての地域の特色を活用した個性ある学校づくりへのきっかけとなっていく。

さらに、この取組が、子どものみならず地域の住民に対して地域の産業や自然環境に対する理解と啓発を進めることになる。

8 特定事業の名称

802 構造改革特別区域研究開発学校設置事業

9 構造改革特別区域において実施し又はその実施を促進しようとする特定事業に関連する事業その他の構造改革特別区域計画の実施に関し地方公共団体が必要と認める事項

(1) 三笠市小中一貫教育研究推進協議会の設置

三笠市の小中一貫教育の目的達成のために、特色ある教育の具体的な内容の検討を行う三笠市小中一貫教育研究推進協議会を設置する。

(2) 「地域教育アドバイザー」の活用

博物館研究員など地域の施設の職員や郷土史の研究家、地域の産業に関わる人々を「地域教育アドバイザー」として、「地域科(三笠発見科)」の授業に活用する。また、博物館

(館内、野外博物館、郷土史資料室)の見学や体験を利用した授業など、地域の施設を十分に活用した授業を行う。

(3) 公民館事業

三笠市公民館事業として、平成17年度から、市内の小中学生や一般市民を対象として、「国際ふれあいパーク」と称した、ALTとの遊びや交流を通しての、異文化理解、豊かな国際感覚を身につける事業を実施する。

(4) 転入生等に対する補充的な授業

転入生に対しては、補充的な授業を一定期間行うことにより、学力の低下にならないように配慮を行う。

構造改革特別区域計画認定申請書別紙

1 特定事業の名称

802 構造改革特別区域研究開発学校設置事業

2 当該規制の特例措置の適用を受けようとする者

三笠市立岡山小学校及び萱野中学校

3 当該規制の特例措置の適用の開始の日

平成17年4月1日

4 特定事業の内容

(1) 事業主体；三笠市

(2) 事業区域；三笠市内岡山小・萱野中学校区

(3) 事業により実現される行為や整備される施設など

- ・小学1年生からの「国際科(OK! ENGLISH)」の英語教育の実施
- ・小学3年生からの「地域科(三笠発見科)」の時間の実施
- ・小学5年生からの「選択学習(岡小チャレンジ)」の実施
- ・小・中学校の「地域科」の時間を指導する「地域教育アドバイザー」の活用
- ・当面整備される施設はなし(将来的には小学校を増築し、一貫校を設置予定)

5 当該規制の特例措置の内容

(1) 取組の期間

平成17年4月から段階的に実施、平成19年度から本格的に実施、平成22年度に事業全体について評価・見直しを実施する。

(2) 教育課程の基準によらない部分

地域の自然、産業、郷土史を学習する「地域科」の時間を創設し、小学3年生～中学2年生まで、「総合的な学習の時間」から年間15時間供出し実施する。

小学1年生から「国際科」の時間を実施するため、1期(小学1年生、2年生)は、生活科から2.5時間(1年生は2.4時間)、音楽科から5時間、特別活動から5時間供出し、2期(小学3年生～5年生)・3期(小学6年生・中学1・2・3年生)のうち、小学6年生は、総合的な学習の時間から3.5時間供出し、年間3.5時間(1年生は3.4時間)実施する。

5年生から選択教科を実施し、5年生、6年生は、総合的な学習の時間から2.0時間供出し、実施する。

*別紙「小中一貫教育の教科等時数一覧表」参照。

「地域科」の時間の設定

地域学習の概要

(1) 目標(ねらい)

三笠の自然、産業、歴史などを生かした学習を行うことにより、自分たちが生活する地域に対する興味・関心を高めるとともに、三笠を知り、三笠を愛し、三笠の未来を考える態度を育成する。

(2) 時数・内容

- ・ 期(小学3年生～小学5年生)は、年間15時間、総合的な学習の時間から確保し、実施
- ・ 期(小学6年生～中学2年生)は、年間15時間、総合的な学習の時間から確保し、実施

なお、時数については、年間15時間であるが、系統性をもって6年間実施することで、全体で90時間の地域学習を行なっていく。

区分	期	期
学年	小学3・4・5年	小学6年、中学1・2年
時数	15時間	15時間
名称	地域科(三笠発見科)	
内容	<p>小学3・4年 地域に存在する学習素材、人材を有効活用し、三笠市の成り立ちを学び、三笠市の姿について考える学習 地域の自然、産業、歴史などに対する興味・関心を高め、人々の生き方を学び取る。</p> <p>小学5年 地域の自然、産業、歴史を学ぶことから、現在の三笠市の姿や自分の生活のあり方を考える学習</p>	<p>小学6年 地域の自然、産業、歴史を学習することを通して、これまでの人々の生活と未来を結ぶのは自分たちであることを考える学習</p> <p>中学1年 地域の自然、産業、歴史を学習することを通して、それらを生かした三笠の未来を思い浮かべ、どのようなまちづくりを進めたらよいか考える学習</p> <p>中学2年 中学生なりの職業観を持ちながら、三笠の未来の姿を思い浮かべ、どのようなまちづくりを進めたらよいか考える学習</p>
備考	社会科・総合的な学習の時間をより発展・充実させる学習を行う。	中学校は2年生まで

「地域科（三笠発見科）」の時間の内容

【目標】

期課程

* 小学3年生、4年生

・地域の自然、産業、歴史などに対する興味・関心を高め、人々の願いや思いを学ぶ。

* 小学5年生

・地域の自然、産業、歴史などの学習を通して、三笠市について理解し、自分の生活と結びつけて考えることができる。

期課程

* 小学6年生～中学2年生

・地域の自然、産業、歴史などの学習を通して、これからの三笠市について考えることができる。

【内容】

期課程

* 小学3年生

・地域の産業（農業、建築業、商業、工業）

* 小学4年生

・健康で安全な暮らし

・三笠市のあゆみ

* 小学5年生

・石炭とまち

・アンモナイトと三笠

期課程

* 小学6年生

・市議会、選挙

・福祉

・環境問題

・生命の誕生

・三笠の自然環境

* 中学1年生

・地域の資源・産業を通じたこれからの三笠

* 中学2年生

・政治、福祉、環境、経済の学習を通じたこれからの三笠

（3）第7次三笠市総合計画と地域科（三笠発見科）設定のねらい

三笠市は、人間尊重を基本とし、誰もがこのまちに住んでいてよかったと思えるまちづくりを進めてきている。第7次総合計画の基本方向として、すべての市民が希望にあふ

れたいいきとした生活ができ、このまちに誇りを持ち、個性的で魅力あるまちを創りあげていくため、都市像を「豊かな新時代の創造 希望滾る人間都市」と定めている。この都市像をめざすために、「健康で安心してすごせるまち」、「活みなぎり元気に働けるまち」、「水清く緑あふれ快適に暮らせるまち」、「人を育み地域文化を創るまち」、「未来をみんなでつくるまち」の5つを基本目標と定めている。

三笠市総合計画審議会の、「人づくりは、まちづくりの根源であり、未来を支える子どもたちを何よりも優先し、家庭・地域社会全体で育ていき、魅力ある三笠の教育の推進に努めていく」答申を受け、子どもたちが、郷土「みかさ」への関心・愛着心を高め、このまちに住んでいることを誇りに思い、まちづくりを考える学習が必要である。

現行の3・4年生の社会科の地域学習は、2年間という限られた期間のため、一時的・一般的な知識獲得で終わりやすく、5・6年生からは日本全体の学習になるため、市や地域の学習に触れることが少なくなる。また、中学1年生の社会では、世界から見た日本についての地理を広く学習することになり、これらの点から、地域を知る機会はあるが、現行の教育課程の中での繋がりという点については、不十分な状況であると言える。三笠市の産業や歴史について、3,4年生の社会科で学ぶことをさらに深めながら、高学年で学ぶ日本の産業や歴史、そして、中学社会科で学ぶ内容と関連付けながら、6年間で継続して教科内容としたい。

また、理科では、教科書の一般的配列に基づき、自然についての学習、観察や実験を行っている。私たちは、その自然環境に影響されながら、自然状況に合わせ、地域で生きている。だからこそ、特色である化石・地層・石炭などの地域素材に焦点をあてることにより、自分たちの生活している地域に関心を高め、計画的に取り組む必要があると考える。博物館の化石資料などは、過去の地球の姿をひも解く手がかりとなる重要な資料であると言われている。三笠市の自然環境や地質学的資料、そして、様々な分野で「生きる」人との関わりを題材に教材開発を行い、新教科として体系化していきたい。

今後、三笠市全市での小中一貫教育の実施を想定しており、それらの貴重な自然素材や様々な分野で「生きる」人を通して学習する新教科として設定し、三笠市の全ての子どもたちが学習する形を設定したい。

このように系統性を持った長期にわたる地域学習は、絶えず自分と地域との関わりについて考えることにつながり、三笠市の自然や三笠市に住む人々と自分を密接に感じることができる。三笠市について様々な角度から学習する中で、知識理解の定着を目指すだけでなく、多くの人々に接し、「仕事」、「生き方」に触れることで、これからの自分の生き方を考える子を育成したい。また、中学生段階においては、職業観に直接的に影響を与える教科内容を目指していく。

それらの学習を継続する中で、自らの生き方を考え、三笠市に愛着を感じ、誇りに思う心情を育むことが、ひいては、未来のまちづくりを考える資質を育てることにつながっていくことができる。

(4) 移行期間における段階的实施

1. 期間の考え方

本格実施まで、2年間は時数・内容や指導体制を検討するための期間とする。そのため、段階的に移行措置に取り組む。

2. 実施内容

17年度、18年度を移行措置期間とし段階的に教育課程を工夫・改善する。指導内容・教材・アドバイザー等は博物館学芸員や教育委員会とも連絡を取り合い、計画を立て推進する。

- ・17年度 10時間実施
- ・18年度 15時間実施

地域科（三笠発見科）学習内容

区分	学年 学年目標 配当時間	学習目標	学習内容の例	地域アドバイザーの例	備考
期	<p>小学3年</p> <p>地域の自然、産業、歴史などに対する興味・関心を高め、人々の願いや想いを学ぶ。</p> <p style="text-align: right;">15時間</p>	<p>地域の産業について</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 農家の人から仕事の話を読み取り、自分たちの生活との結びつきや仕事の苦勞・工夫を考えることが出来るようにする。 2. 建設業の人から仕事の話を読み取り、自分たちの生活との結びつきや仕事の苦勞・工夫を考えることが出来るようにする。 3. 商店の人から仕事の話を読み取り、自分たちの生活との結びつきや仕事の苦勞・工夫を考えることが出来るようにする。 4. 工場の人から仕事の話を読み取り、自分たちの生活との結びつきや仕事の苦勞・工夫を考えることが出来るようにする。 <p>地域の自然について 地域の地形の学習を通して、まわりの自然と人々の暮らしについて考えることが出来るようにする。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 米作りに関する仕事の苦勞・工夫について専門家から話を聞いたり、田植え等を行い仕事内容や自分の生活との結びつきを考える。 米作りに関する地域の文化としての傘踊りに関して云われや踊りに取り組む。 ・地域の産業である玉葱作りについて専門家に話を伺い、仕事内容や、自分の生活との結びつきを考える。 ・ぶどう作りについて専門家に話を伺い、仕事内容や、自分の生活との結びつきを考える。 2. 地域にある建設会社の人から話を伺い、仕事内容や、自分の生活との結びつきを考える。 3. 地域にある商店の人から話を伺い、仕事内容や、自分の生活との結びつきを考える 4. 地域にある工場の人から仕事の話等を伺い、仕事内容や、自分の生活との結びつきを考える。 <p>岡本の沢の林道などのフィールドワークを通して地域の自然の特色と人々の生活との結びつきを考える。</p>	<p>農家</p> <p>企業</p> <p>商店</p> <p>企業</p> <p>博物館学芸員</p>	<p>3年 社会科 総合的な学習</p> <p>運動会</p> <p>3年 社会科</p> <p>3年 社会科</p> <p>3年 社会科</p>

区分	学年 学年目標 配当時間	学習目標	学習内容の例	地域アドバイザーの例	備考
	小学4年 地域の自然、産業、歴史などに対する興味・関心を高め、人々の願いや想いを学ぶ。 15時間	まちづくりの仕組み 健康で安全な暮らしをささえるために、三笠市が取り組んでいることについて、市の職員から話を聞き、その仕組みや仕事の工夫・苦労について考えることが出来るようにする。 まちの歴史 三笠市のあゆみを知っている人を講師に招き話を聞いたり・見学・調査し人々の生活の変化や願いを考えることが出来るようにする。 まちの自然 まちの地質や地層を調べることを通して、自然の特色と人々の暮らしについて考えることが出来るようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・飲料水や廃棄物の処理、火事、交通事故について各職員から話を伺い、仕事の仕組みや仕事の苦労や工夫について考える。 ・市役所、老人福祉センター、市立病院、博物館など職員から話を伺い、三笠市が取り組んでいることについて様々なことについて考える。 <p>三笠市の特色であった、石炭についての歴史、採掘、利用、炭坑生活・北海盆踊りについて専門家に話を伺い、その当時の様子や人々の願いを考える。</p> <p>それにかかわって当時の鉄道や道路について熟知している方から話を伺う、その当時の様子や人々の願いを考える。</p> <p>地質や地層について専門家から話を聞いたり、サイクリング・ロードを歩いたりしてまちの地形の特色と人々の生活と結びつけて考える。</p>	浄水場職員 消防署署員 警察署署員 市役所職員 施設職員 地域の入院職員 学芸員 郷土史研究家 博物館・野外博物館・立抗跡・炭住・碑・鉄道村 博物館学芸員	3年 社会科 4年 社会科 4年 社会科 4年 社会科 4年 社会科 4年 社会科 4年 社会科 4年 社会科 4年 社会科
	小学5年 地域の自然、産業、歴史などに対する興味・関心を高め、それらを通して、現在の三笠市の姿や自分の生活のあり方を考える。 15時間	まちの歴史・産業について 石炭産業で栄えた町ということ、当時のことを知る人から話を聞き、今の様子と比較し、当時の人々の思いに気付くことが出来るようにする。 自然 桂沢湖周辺や幾春別川を歩きながらアンモナイト採掘体験を通して、三笠市が貴重な化石資源の宝庫であることを学び、環境問題を考える素地を養う。	<ol style="list-style-type: none"> 1. 石炭産業が盛んなころを知る方や詳しい方から、当時の生活等を聞き、三笠の様子や人々の思いを考える。 2. 炭坑の閉山のころを知る方や詳しい方から、当時の生活等を聞き、三笠の様子や人々の思いを考える。 <p>アンモナイトの採掘や専門家の話を聞くなかで、三笠の地域の様子や特色を学び、環境問題を考えたり、それにたずさわる人々の思いを知る。</p>	元抗夫、祖父母、地域のお年寄り、元鉄道員 元抗夫、祖父母、地域のお年寄り、元鉄道員 博物館学芸員	4、5年社会科 6年理科 中学1、3年

区分	学年 学年目標 配当時間	学習目標	学習内容の例	地域アドバイザーの例	備考
期	小学6年 地域の自然、産業、歴史を学習することを通して、これまでの人々の生活と未来を結ぶのは自分たちであることを学ぶ。 15時間	まちづくりの仕組み 1. 市議会の様子、選挙の仕方など市民の意見をどのように反映させるのかなど、具体的な場面を理解できるようにする。 2. 社会福祉、老人福祉や少子高齢化社会という視点で、三笠市の現在の姿を学ぶことが出来るようにする。 自然の特色 1. アンモナイトなどの化石の学習を通して、環境問題や人々の生活との関係について学ぶことが出来るようにする。 2. 三笠の森がどうなっているか、ダム周辺の自然環境はどのようになっているか、自然環境について考えることが出来るようにする。	1. 市議会の様子を見たり、市役所職員の方から選挙の仕方や議員の方から選挙についての思いなど伺いその仕組みについて知る。 2. 社会福祉、老人福祉にかかわる方々から三笠市の福祉について話を伺い、今後の三笠市あり方について考える。 1. アンモナイトの学習を通して、アンモナイトと環境問題についてのかかわりを考えたり、それにたずさわる人々の思いを考える。 2. 三笠の森林について詳しく知る方から話を伺うなどして、三笠市の自然環境を知り、それにたずさわる人々の思いを考える。	市役所職員 選挙管理委員会 市会議員 施設の方、社会福祉協議会などの方々、老人福祉の方、介護士 博物館学芸員 開発局の方	6年 社会科 6年 社会科 5年 社会科 5年 社会科
	中学1年 地域の自然、産業、歴史を学習することを通して、それらを生かした三笠の未来を思い浮かべ、どのようなまち作りを進めたらよいか考える。 15時間	地域の産業・資源・自然について 1. 身近な地域の資源・産業の学習を通して、地域の資源・産業に対する興味・関心を高め、人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考えることが出来るようにする。 2. 桂沢湖周辺を歩きながら、アンモナイト採掘体験や、詳しく調べることを通してアンモナイトと環境問題を考えることが出来るようにする。 歴史・文化について 1. 身近な地域の生活・文化の学習を通して、地域の生活・文化に対する興味・関心を高め、人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考えることが出来る。 2. 身近な地域の歴史等や具体的な事象の学習を通して、地域の歴史に対する興味・関心を高め、地域的特色や人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考えることが出来る。	1. 地域の資源・産業に関して詳しい方の話を伺い、資源や産業の実態を知り、人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考える。 2. アンモナイトの学習をもとに、アンモナイトと環境問題についてのかかわりを考えたり、それにたずさわる人々の思いを考える。 1. 地域の生活・文化に関して詳しい方の話を伺い、生活や文化に触れ、人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考える。 2. 地域の歴史に詳しい方から話を伺い、具体的な事象等の学習を通して、地域の歴史特色や人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考える。	産業課 工場職員 農家 博物館学芸員 文化協会の方々 郷土史研究者	中学 地理 中学 地理 中学 地理

区分	学年 学年目標 配当時間	学習目標	学習内容の例	地域アドバイザーの例	備考
	中学2年 中学生なりの職業観を持ちながら、三笠の未来の姿を思い浮かべ、どのようなまち作りを進めたらよいか考える。 15時間	政治・福祉について 1. 政治の学習を通して、わたし達の暮らしとのかかわりや人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考えることができる。 2. 福祉の学習を通して、わたし達の暮らしとのかかわりや人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考えることができる。 環境・経済について 1. 環境問題の学習を通して、わたし達の暮らしとの関係や人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考えることができる。 2. 経済の学習を通して、わたし達の暮らしとのかかわりや人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考えることができる。	1. 議会傍聴、政治に詳しい方等の話を伺い、市の政治についての様子を知り、人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考える。 2. 福祉施設訪問、福祉活動の様子や福祉に詳しい方等の話を伺い、市の福祉についての様子を知り、人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考える。 1. 環境に詳しい方等の話を伺い、環境問題について知り、人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考える。 2. 商店街訪問、会社訪問や経済に詳しい方等の話を伺い、市の経済についての様子を知り、人の営みや絆を考え、これからの三笠市について考える。	市長 市議員 市役所職員 福祉関係者 市役所職員 会社経営者	中学 公民 中学 公民 中学 公民 中学 公民 中学校は2年生まで。中学3年生は、総合的な学習の時間で個別に、発展的に取り扱う。

その他 実践は、学習例を参考にし、学校の実態に合わせて計画を立て実施する。

小学校からの英語教育「国際科」の導入

(1) なぜ小学校で国際科を導入するのか。

現在の学校教育における英語科は、中学校から導入されている。以前の英語科は、「読む・書く」などの文法指導が中心であった。そのため、「受験英語」と言われたり、「会話」の出来ない大人という批判を生んでしまった。一方で、現行の学習指導要領では、「コミュニケーション能力」の育成が重視されている。

渡邊 寛治氏（国立教育研究所室長）がまとめた21世紀の外国語教育の方針を引用する。

「実践的コミュニケーション能力」を育成する事。

（外国語を使って、「情報や相手の意向」や「自分の考え」のような「意味内容」を伝え合う能力を培う事であり、いわば国際交流等が可能になるようなコミュニケーション能力を育成する事である。）

外国語の学習を通して、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度と、視野を広げ異文化を理解し尊重する態度」を育成する事。 「小学校英会話指導のテクニックとプラン」(教育開発研究所発行)から引用

すなわち「国際的に通用する発信型・実践的コミュニケーション能力と態度」の育成が求められているのである。

「実践的コミュニケーション能力」の育成を願うのならば、中学生になってからの言語習得では難しい。それは、児童の発達段階に起因している。脳の発揮する力、すなわち、「脳力」の「臨界期」が9歳前後にあると考えられる。脳力の「臨界期」とは、以下の通りである。

脳は、8歳までに約90%の成長がなされる。この時期を「臨界期」と呼び、言語に関しても、臨界期までに、多国語環境に身を置く事により、外国語を母語並みに扱う力を育成する事が可能になる。（北海道大学大学院 医学研究科脳科学専攻教授澤口俊之氏の講演による。） 「総合的な学習の時間」における小学校英語活動の手引「ハローイングリッシュ」(北海道立教育研究所編)から引用

アメリカ合衆国やカナダで盛んに行われている第二言語の習得に関する研究でも、同様な結果が報告されている。つまり、臨界期以前の子どもは、右脳発達の影響で無意識に外国語を習得する事が出来るが、臨界期以降の子どもは、左脳が発達するため、物事を論理的に思考するようになり、外国語習得の過程においても母国語に干渉され、意識化されるということである。もちろんこの説が必ずしも絶対とは言えないが、小学生の時期に外国語に触れ、音声面の感覚や能力を養ったり外国の文化に触れる事は、「実践的コミュニケーション能力」

を養う事に繋がるのである。外国語の中でも、多くの国でより多くの人々に使われているのが英語であるため、コミュニケーションをとる手段の一つとして「英語」に取り組む。

また、小学校段階の子どもは、新しい事象への関心が高く、異文化や外国の人との関わりを自然に受け入れる事ができる。「違いへの寛容さ」があるのである。この感性や柔軟性を持って英語に触れる事が、国際理解やコミュニケーション能力育成に重要なのである。

もちろんここで、英語文化への崇拝や英語以外の文化への蔑視が生まれないように注意していかなければ、「国際理解」には繋がらない。あくまで「異文化を知る」という経験の入り口として行うのである。

岡山小学校においても、同様な児童の実態が見られる事から、小学校段階からの英語指導（国際理解教育）が実践的コミュニケーション能力や豊かな国際感覚の育成に繋がると考え、教育課程に導入することにした。英語を窓として、子どもたちの視野を、広く世界に向けさせることが重要なのである。

（２）小学校国際科での学習について

中学校や高等学校では言語材料が中心となるため、どうしても文型や単語など、いわゆる「言語要素」の指導が中心となりがちである。しかし、小学校において英語活動を行う際には、コミュニケーション能力の育成を目標にしているため、英語に「慣れ親しむ」活動を中心に内容を考えなければならない。英語指導と文字指導についてどう指導していくか、様々な考えがあるが、「国際科」では後述するいくつかの理由により、「話す・聞く」の内容を中心に指導を行う。

ねらい

小学校段階から英語に慣れ親しみ、中学校英語へのスムーズな移行を図るとともに、外国語や外国文化に興味・関心を持ち豊かな国際感覚を養いながら、積極的に交流を図ろうとする態度など、コミュニケーション能力を育成する。

学習内容

区分	学 年	時 数	名称	目 標	内 容
期	1 年	3 4	O K ! I S H ! N G L	歌やゲーム、遊びに英語を取り入れることにより、英語の音やリズムに慣れ親しむ。	「聞く、話す」を中心とした英語活動。 歌、ゲーム、遊び、あいさつ等
	2 年	3 5			
期	3 年	3 5		歌やゲームの中で、身近で簡単な英語をまねて、身振り・表情を使いながら挨拶をしたり、自分の事を伝えることができる。	「聞く、話す」を中心に、ジェスチャーなどの非言語手段を加えた英語活動。 自己紹介・自分の生活を伝える

期	4 年	3 5	身近で簡単な英語を聞き取ったり、発語することにより、外国人と意思を通わせる楽しみを味わうとともに、色々な国の文化に違いがあることに気付くことができる。	「聞く、話す」を中心に、簡単な英会話。交流活動。 単語・慣用語を覚える 英会話あそび 留学生との交流 食生活文化の交流
	5 年	3 5	英語の音声を正しくとらえ、基礎的な英語を正しく聞いたり話したりすることができるとともに、外国の生活や文化に関心を持ち交流活動をすることができる。	「聞く、話す」を中心に、基礎的な英会話。交流活動。 単語・慣用句を覚える 英会話劇 スポーツや地域行事での交流
	6 年	3 5	話されたり読まれたりしたことを正しく聞き取り、基礎的な会話や挨拶ができる。また、簡単な文を読み取ったり、語と語の区切りなどに注意して簡単な文を書くことができる。	「読む・書く」を中心に、表現活動。地域発信活動。 文字・符号 単文作り 地域パンフレットや看板・標示作成活動
	中 1	1 0 5	小学校段階で習得した「聞く・話す・読む・書く」の四領域の活動の基礎・基本を使った表現活動ができる。	言語習得活動 「聞く・話す・読む・書く」の四領域にわたる活動 国際理解学習
	中 2	1 0 5		
	中 3	1 0 5		

音だけによる英語学習の必要性

小学校からの意思伝達(コミュニケーション)手段としての英語学習を行なううえで、直接ことばを聞き取ることが重要で、小学校段階での音だけによる英語学習の必要性がある。

母語習得の過程を見ても、まず音声を聞く事から始まり、そして話せるようになり、学校へ入って文字が書けるようになります。日本では、中学校で英語の音と文字が一度に押し寄せてくる事から、かなりの負担を生徒に与えていると言われています。このため、本格的な文字を使った英語学習を行う前に数年の音だけによる英語学習が必要と言われています。小学校段階は音だけによる英語学習の絶好の時期

なのです。

例えば、「May I open it?」を音だけで聞いて話していた時には、「メイアイオウプニィ」というようにネイティブに近い言い方をしていたのが、文字を見せたとたんに、「メイ・アイ・オープン・イット」というように単語と単語を離して読んでしまう事があります。子どもがせっかく「May I open it?」と続けて聞こえ、身についていた音を大事にしたいものです。

「総合的な学習の時間」における小学校英語活動の手引「ハローイングリッシュ」（北海道立教育研究所編）から引用

英語嫌いを作らない

英語教育はこれまで、学習した事を正しく再生するという観念が強く、記憶を正確にするために、文字を通して暗記を強要し、その結果、英語嫌いを生み出してきた。「学ぶべき内容」を文法や語彙といったことばのルールで縛るのではなく、人と人とのつながりを言葉の学習を通して体験する事をねらいとして、英語教育の内容を組み立てなければ、英語嫌いの子どもの生む時期を早めたり、その原因になってしまうのである。

小学校段階においては、文字と音声の同時指導は子どもの負担になってしまう。国際科の授業においては、頭で「覚える英語」ではなく、体全体を使って「自然と身に付いてしまう英語」を取り上げる。また、本格的な英語学習の前段階として、英語の音に十分慣れ親しんでおくことが、言語の習得段階として重要であり、中学校の英語学習へのスムーズな移行になるのである。

英語音ももたらす楽しさを知る

日本語は文字言語として発達した部分が多い言語であるのに対して、英語は音声言語として、また、コミュニケーションの重要な手段として発達してきた部分が多い。つまり、英語圏では、日本文化と比較にならないくらい音声言語によるコミュニケーション重視の文化が育まれてきたのである。その結果の一つとして、英語音には、人の心を楽しくしてくれる要素があるといわれる。そこで、歌やチャンツによるリズムカルで楽しい英語音をたくさん聞く事にすると、より子どもたちが英語や英語圏の文化に慣れ親しむことができるのである。

年間35時間という時間数ではあるが、子どもたちの実態や発達段階を考え学習内容をより厳選し、文字表記の練習を重視すると、指導時間が大幅に削減されてしまうため、「聞く・話す」を中心に学習していくことで、目標は、十分に達成されるものである。

英語の文字表記を小学校段階で目に触れていく事は、十分考えられる活動である。小学校の国際科でコミュニケーション能力の基礎が培われれば、中学校国際科では「書く」作業に当てる時間がしっかりと確保される。英語の音に慣れ親しんだ後では、文字表記されたものを見ても、単語を切り離したり、カタカナ発音になる事もなくなる。

小学校では、意思伝達（コミュニケーション）の手段としての英語を取り入れる。

(3) 国際科の学習を進める際の留意点

児童の実態・発達段階に応じた独自の教材の選定、作成

国際科の英語学習を進めるにあたって、次の点に留意し、独自の教材を選定、作成する。

- ア．音声を中心とした教材であること
- イ．子どもの視覚と聴覚、触覚に直接触れられる事の出来る具体的な教材であること
- ウ．子どもの日常生活や学校生活に密着した教材であること
- エ．子どもが興味・関心を抱ける面白い教材であること
- オ．表現が基礎的・基本的なものになっていること
- カ．異文化理解を意識した教材にも触れること

《 期 》～ことばで遊ぶ段階

- ア．コミュニケーションを楽しむことができるもの
- イ．身体表現が好きな時期なので、楽しい言語活動ができるもの
- ウ．五感が鋭敏なので、映像や音など視聴覚に訴えるもの
- エ．単純なくり返しを苦にしない
- オ．文化の相違に触れる事が出来るもの

《 期 》～ことばで遊ぶとともに会話を楽しむ段階

- ア．コミュニケーションを楽しむ事ができるもの
- イ．身体表現を取り入れた言語活動と五感（特に視聴覚）に訴えるもの
- ウ．単純なくり返しの練習に耐えられる
- エ．会話重視の言語活動の楽しさを感じ取れるもの
- オ．文化の相違に目覚める事が出来るもの

《 期(小学6年生) 》～ことばで遊ぶだけでなく、自分の気持ちを交えた会話を楽しむ段階

- ア．コミュニケーションを楽しむことが出来るもの
- イ．五感（とくに視聴覚）に訴えるもの
- ウ．この時期になると、そろそろくり返しの練習に飽きる傾向がある
- エ．子どもが会話重視の言語活動を楽しみながら自分自身の思いを主体的に創り出し、表現行動で示す事が出来るもの
- オ．文化の相違を学習できるもの

他教科とのかかわり(時数)

ア． 期における

- ・生活科より 2.5時間(1年生は2.4時間)
- ・音楽科より 5時間
- ・特別活動より 5時間

年間 3.5時間(1年生は3.4時間)

(学習指導要領との関わり)

生活科の目標

- (1) 自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などのかかわりに関心を持ち、それらに愛着をもつことができるようにするとともに、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動できるようにする。

・生活科の内容

- (3) 自分たちの生活は地域の人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみを持ち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。

音楽科の目標

- (1) 楽しい音楽活動を通して、音楽に対する興味・関心を持ち、音楽体験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。

・音楽科の内容

A 表現

- (2) 楽曲の気分や音楽を特徴付けている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする。

特別活動の目標

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

国際科の目標や内容と生活科の人との関わりによるコミュニケーション能力の育成、音楽科の楽しい音楽活動と英語教育における歌やゲーム、コミュニケーション能力の育成を重視した英語教育を行なうことでイニシアティブが育成され、特別活動の目標である自主的、実践的な態度が育てられる。また、総合的な学習の時間の国際理解の点で、重複する部分があるため、それぞれの教科の時数から国際科の時数を生み出す事とする。

校内の英語環境整備

国際科の授業内に限らず、校内に英語の環境を作る。このことは、国際理解教育への関心・意欲の向上、動機付けの上でも有効である。

ア. 日常的にALTとの関わりを持ったり、校内で英語であいさつしたり会話する場面を多く持つ。

イ. “OK! English!” 教室を設置する。

“そこへ行けば、英語に触れられる”というスペースを設ける事で、日常的に英語や国際社会や文化を意識する事が出来る。外国の人形や玩具などの資料を展示したり、英語で書かれた絵本やビデオ、CDを使用する事ができるようにしておく。

ウ. 自己学習の場を

休み時間や放課後を利用して、ALTと会話したり、“OK! English

h！”教室などで英語を自分で学習できるようにする。

移行期における指導

来年度、全学年同時に国際科をスタートさせる移行期間であるため、大きな問題点が生じる。それは、全学年が同時に入門期となるためである。そのため、試行期間は特別カリキュラムで進まなければならない。

各学年の特性を考慮しつつ、同じような教材を扱うところからスタートしたい。その後は、児童の実態を考えながら、カリキュラムを微調整したり、言語材料や指導法を変えながら、学習を進めていく。

転入生についても、初めのうちは個別で導入指導を行ったり、学級全体で復習をしつつ、入門期の指導を行う。

*平成17年度

- ・小学1・2年生
期カリキュラム 35時間(1年生は34時間)
- ・小学3・4年生
(4～9月) 期カリキュラム 17時間
(10～3月) 3年生カリキュラム 18時間
- ・小学5・6年生
(4～9月) 期カリキュラム 17時間
(10～3月) 4年生カリキュラム 18時間

*平成18年度

- ・小学1・2年生
期カリキュラム 35時間(1年生は34時間)
- ・小学3年生
3年生カリキュラム 35時間
- ・小学4年生
4年生カリキュラム 35時間
- ・小学5年生
(4～9月) 4年生カリキュラム 17時間
(10～3月) 5年生カリキュラム 18時間
- ・小学6年生
(4～9月) 5年生カリキュラム 17時間
(10～3月) 6年生カリキュラム 18時間

国際科（OK！ ENGLISH！）のカリキュラム実施に関わる移行措置について

小中一貫国際化カリキュラムの全面実施は、平成 19 年度からすると共に、平成 17 年度、平成 18 年度を移行措置期間とし、それぞれ 35 時間を当てる。無理のない形で、2007 年度の全面実施につなげるため、各学年毎、段階的にカリキュラムを進める。

	平成 17 年度			平成 18 年度			平成 19 年度
						1 年生	全 面 実 施
			1 年生	4～3月(34時間) 期カリキュラム		2 年生	
1 年生	4～3月(34時間) 期カリキュラム		2 年生	4～3月(35時間) 期カリキュラム 繰り返し		3 年生	
2 年生	4～3月(35時間) 期カリキュラム		3 年生	4～3月(35時間) 3年生カリキュラム		4 年生	
3 年生	4～9月 (17時間) 期カリキュラム	10月～3月 (18時間) 3年カリキュラム	4 年生	4～3月(35時間) 4年カリキュラム		5 年生	
4 年生	4～9月 (17時間) 期カリキュラム	10月～3月 (18時間)3 年カリキュラム	5 年生	4～9月(17 時間)4年カ リキュラム	10月～3月 (18時間)5 年カリキュラム	6 年生	
5 年生	4～9月 (17時間) 期カリキュラム	10月～3月 (18時間)4 年カリキュラム	6 年生	4～9月(17 時間)5年カ リキュラム	10月～3月 (18時間)6 年カリキュラム		
6 年生	4～9月 (17時間) 期カリキュラム	10月～3月 (18時間)4 年カリキュラム					

指導上の学年別留意点

学習目標や発達段階の特性に応じて、各学年の指導を考える。

《 期 》

・小学1・2年生

ア．リズム活動（チャンツなど）や動作活動を活用する。

イ．できるだけ聞いた通りに発語させる。

ウ．基本的な単語や表現はくり返し言うようにする。

エ．歌やゲーム、あいさつなどを通じて基本となる単語や表現を学ばせる。

《 期 》

・小学3年生

ア．A E Tと会話する体験をする。

イ．グループごとや隣の人、担任などいろいろな人とコミュニケーションをとる場を設定する。

ウ．知っている語や表現を使って、どんどん話す活動を行う。

・小学4年生

ア．日常の事や身近な出来事など、できるだけ自己表現に繋がる活動を行う。

イ．歌やゲーム、創作活動はできるだけ単純ではなく意味のあるものを行う。

ウ．よくできたときはみんなの前でほめ、活動を奨励するようにする。

・小学5年生

ア．それぞれの子どもの関心事や価値観に結び付けて自己表現させる。

イ．知っている単語や表現を使ってスピーチをし、知識・体験を分かち合う活動を行う。

ウ．自分たちで劇の練習をしたり、英語の歌の練習をしたりして自己表現する喜びを感じさせる。

エ．間違える事への不安や緊張があると活動が低下するので、あまり細かな注意はしない。

《 期 》

・小学6年生

ア．羞恥心が強くなる時期なので人前で恥をかかせたりしないよう留意する。

イ．なんのためにやり、これをやると何ができるようになるのかを説明する。

ウ．中学校への繋がりが重要な時期であるため、簡単な文章の読み書きにも触れる。

中学校との系統性について

ア．カリキュラムの系統性

小学校で学習した事が中学校の内容と重複してしまう事がある。中学校で既習事項を扱わないのではなく、小学校で身に付けたことを中学校でより伸ばしていくものである。

イ．教師の連携

小学校の国際科授業は、A L Tと担任とで行う。中学校では、英語教師が中心となりA L Tとともに進行。教員が互いに授業を見せ合ったり、子どもの実態を話し合い、常にカリキュラムの改善を図る。

国際科（OK English!）年間指導計画表

第 期	
第 1 学 年	第 2 学 年
学 習 目 標（ 内 容 ）	学 習 目 標（ 内 容 ）
・ 国際科の学習を理解しよう （オリエンテーション） 1 時間	・ 国際科の学習を理解しよう （オリエンテーション） 1 時間
・ アルファベットを覚えよう 3 時間	・ 簡単な挨拶を英語で言おう 3 時間
・ 簡単な挨拶を英語で言おう 3 時間	・ 簡単な数字を英語で言おう 3 時間
・ 簡単な挨拶を英語で言おう 3 時間	・ 身近な日用品を英語で言おう 3 時間
・ 簡単な数字を英語で言おう 4 時間	・ 身近な建物を英語で言おう 3 時間
・ 季節や月、曜日を英語で言おう 3 時間	・ 身近な国を英語で言おう 2 時間
・ 色や形を英語で言おう 3 時間	・ 身近な人物を英語で言おう 2 時間
・ 身近な動物を英語で言おう 3 時間	・ 身近なスポーツを英語で言おう 2 時間
・ 体の部分を英語で言おう 3 時間	・ 身近な行事を英語で言おう 4 時間
・ 身近な食べ物を英語で言おう 3 時間	・ 感情を表す英語を学ぼう 3 時間
・ 身近な日用品を英語で言おう 4 時間	・ 物の特徴（大きさ、重さ、長さなど）を 英語で言おう 4 時間
・ 1 年間の学習を振り返ろう 1 時間	・ 1 年間の学習を振り返ろう 5 時間

第 期		
第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年
学習目標（内容）	学習目標（内容）	学習目標（内容）
・国際科の学習を理解しよう （前年度の復習とオリエンテーション） 3時間	・国際科の学習を理解しよう （前年度の復習とオリエンテーション） 3時間	・国際科の学習を理解しよう （前年度の復習とオリエンテーション） 3時間
・簡単な自己紹介をしよう 2時間	・簡単な自己紹介をしよう 2時間	・簡単な自己紹介をしよう 2時間
・天候や日時について対話しよう 3時間	・好きな物について対話しよう 3時間	・自分の家族について紹介しよう 2時間
・物をたずねる言い方を学ぼう 4時間	・動作を表す英語を使って対話しよう 4時間	・物を頼む時や許可を得る時の表現を学ぼう 2時間
・物の状態や様子を表す英語を学ぼう 2時間	・日常生活について説明しよう 3時間	・過去の事について英語で話そう 4時間
・簡単な英語の歌を歌おう 3時間	・簡単な英語の歌を歌おう 3時間	・簡単な英語の歌を歌おう 3時間
・物がある場所について説明する英語を言おう 3時間	・道順をたずねる言い方を覚えよう 3時間	・自分の住んでいる町や地域に関する良いところを考えよう 3時間
・動作を表す英語を覚えよう 4時間	・行事で用いられる挨拶を覚えよう 2時間	・身近な話題に関する自分の考えや意見を伝えよう 3時間
・自分が好きな物について英語で言おう 3時間	・住んでいる町について説明しよう 3時間	・英語スピーチにチャレンジしよう 4時間
・値段の表し方を覚えよう 2時間	・外国の食べ物や習慣の違いについて学ぼう 3時間	・通訳を目指そう 3時間
・買い物ゲームをしよう 3時間	・電話での会話を学ぼう 3時間	・1時間の授業をすべて英語で話そう 3時間
・1年間の学習を振り返ろう 3時間	・1年間の学習を振り返ろう 3時間	・1年間の学習を振り返ろう 3時間

第 期			
第 6 学年	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年
学習目標（内容）	学習目標（内容）	学習目標（内容）	学習目標（内容）
・国際科の学習を理解しよう（前年度の復習とオリエンテーション）2時間	・国際科の学習を理解しよう（前年度の復習とオリエンテーション）	・国際科の学習を理解しよう（前年度の復習とオリエンテーション）	・国際科の学習を理解しよう（前年度の復習とオリエンテーション）
・アルファベットを書こう 4時間	・異文化理解 「ALTの故郷の特色」についての英語問答	・異文化理解 「外国の衣食住」について（情報収集）	・「三笠市の良いところ」に関する英文を作って発表しよう 情報収集
・アルファベット「a～z」から始まる単語を書こう 4時間	・電子メールの利用方法と英文の作り方を学ぶ	・異文化理解 「外国の衣食住」について（情報整理）	・「三笠市の良いところ」に関する英文を作って発表しよう 情報整理
・アルファベット発音との違いに理解し単語を書こう 3時間	・英字新聞の読解	・異文化理解 「外国の衣食住」について（英文・レポート作成）	・「三笠市の良いところ」に関する英文を作って発表しよう まちづくりに向けた提言を考察
・アルファベット発音との違いに理解し単語を書こう 3時間	・「日本の特色」に関する英文を作って発表しよう 情報収集	・「北海道」に関する英文を作って発表しよう 情報収集	・「三笠市の良いところ」に関する英文を作って発表しよう 英文・レポート作成
・聞き取った英文を正確に書いてみよう 3時間	・「日本の特色」に関する英文を作って発表しよう 情報整理	・「北海道」に関する英文を作って発表しよう 情報整理	・「三笠市の良いところ」に関する英文を作って発表しよう 英文・レポート発表
・聞き取った英文を正確に書いてみよう 3時間	・「日本の特色」に関する英文を作って発表しよう 英文・レポート作成	・「北海道」に関する英文を作って発表しよう 英文・レポート作成	・オジカハパレットを英文で作成しよう 「三笠市の良いところ」を含めた町の特色をまとめる
・看板や標語を英語で書いてみよう 4時間	・「日本の特色」に関する英文を作って発表しよう 英文・レポート発表	・「北海道」に関する英文を作って発表しよう 英文・レポート発表	・オジカハパレットを英文で作成しよう 英文作成
・英語で日記を書こう 2時間	・異文化理解 「ALTの故郷と日本の違い」についてのまとめ	・異文化理解 「外国との習慣の違い」についてのまとめ	・オジカハパレットを英文で作成しよう パレット作成

・英語で手紙を書こう 3時間	・1年間の学習を振り返ろう	・1年間の学習を振り返ろう	・自分の住む町「三笠市」の特色を他地域に発信しよう 発信活動
・英語の物語を読もう 2時間			・1年間の学習を振り返ろう
・1年間の学習を振り返ろう 2時間			

評価について

国際科の評価として、2種類の評価が考えられる。「子どもの学習状況の評価」と「授業評価」である。

「子どもの学習状況の評価」として、他教科のように観点別評価が考えられるが、観点がまだ明確になっていないため、初年度は子どもの学習状況や様子を記述式で評価することとする。その後の評価方法や評定については、試行期間内で検討していく。

「授業評価」としては、

1. 英語活動が子どもたちの実態にあったものであったか。
 - ・ 子どもたちの興味・関心を引きつけたか。
 - ・ 子どもの学習負担は適切であったか。
 - ・ 子どもの実態に合った活動内容であったか。
2. 活動に即した教材・教具が工夫されていたか。
3. 担任・AETの役割分担は適正だったか。

などの観点で行うことが考えられる。この評価の積み重ねをもとにカリキュラムや学習内容の見直しを行っていく。

小学5年生からの「選択学習」(岡小チャレンジ科)の実施

(1) 目標(ねらい)

小学校5,6年生において、中学校「選択教科」の趣旨を生かした学習を実施する。児童が入学時から前学年までに学んだ基礎基本と児童の生活や興味関心を結びつけた学習に主体的に取り組むなかで、個性能力の伸長を図りながら、基礎基本の定着を図る。また、基礎基本を日常生活に生かそうとする態度を養うとともに、基礎基本を身に付けることの大切さや楽しさを実感させ、その後の学習に向けて目的意識を持たせるなど、意欲の高揚を図る。

各教科との関連を基本とし、指導者が児童生徒の能力、適性、興味関心等の実態に十分に配慮しながら学習内容を選択、設定する。

(2) 時数・内容

選択学習の内容は、子どもの生活や興味関心と学習内容とを結びつけた学習を行い、芸能・体育的な内容に限らず、各教科との関連や発展、小学校と中学校の連携も考慮する。

時 数

- ・ 小学5年生・6年生

年間 20 時間を総合的な学習の時間から確保し実施する。

前 期		後 期	
4 月	5 ～ 9 月	9 ～ 10 月初	10 ～ 2 月
意向調査 教材準備	「選択学習 A」 「選択学習 B」	意向調査 教材準備	「選択学習 C」 「選択学習 D」

内 容

国語	漢字の仲間分けクイズ
算数	目指せインド人～12の段九九を作ろう～ 形パズルを作ろう
社会	都道府県パズル 遠足マップづくり
理科	冷蔵庫の中は酸性？アルカリ性？～リトマス紙で調べよう～ 池を作って生き物を飼おう
図工	岡小模型を作ろう 大昔にタイムスリップ
家庭	ジュースとお菓子でハウマッチ？ おいしい分量は？
体育	岡小アスレチック化大計画 なんでもオリンピック～時間や長さ、重さで競う～

(3) 移行期の実施時数について

指導体制や条件整備のため、段階的な時数で実施していく。

平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
特区申請	移行期間 1 年目	移行期間 2 年目	本格実施
「選択学習」内容 検討 教材開発	後期 10 時間 試行実施	前・後期 20 時間 試行実施	前・後期 20 時間 本格実施
<ul style="list-style-type: none"> 考えられる内容を検討して行く中で、必要となる備品などの検討も必要 実際に試行していきながら、指導者増（中学校）の可能性も模索 		<ul style="list-style-type: none"> 試行 改善とともに、カリキュラム化のための積み上げ 	